

九月のテーマ 波に乗る

リズムに乗る

丸山竹秋

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所会長・丸山竹秋（一九二一～一九九九）のこぼしを掲載します。



え・小島サエキチ

① 三人寄ってきて「セーノ！」のかけ声もろとも、ピアノ

をかつきあげる。三百キロから六百キロくらいの重さのあるものを、ヒョイとかついで歩きます。そして、トラックにつみ上げ、おろし、時には機械の力をかりて、高いビル

の部屋に運び上げたりするのである。「たいへんですね。力がいるでしょう」ときくと、「もちろん力はいりませんがね。それよりもリズムに乗ることですよ。調子をあわせなければ、こんな重いものを傷つけずに運ぶことはできませんわ」との答えが屈強な男たちから返ってきた。

ピアノの運送は専門家の仕事だ。そのコツは、言う通りリズムに乗って協力することだ。一人が勝手なことをやっていると運べない。

リズムが重要だといっても、いつもかんとんにそのリズムに乗れるわけではない。時にはリズムを乗りはずして、よろめき、ケガをしそうになったりする。だから、苦心や努力がいつも必要だ。だが

しかし、そこにこそ運搬、運送の面白味もあるのである。何でも楽々とできたら、人生に面白味もなければ、爽快さもあるまい。

事業は世の中の変化によって大きな影響を受ける。その変化にも限らない綾というべきものがあって、一様ではない。また盛んになったり、衰えたりして循環するリズムもある。衰えるリズムにもその乗りかたがあるのだ。

あわてつ放しの落胆しつ放し、悲しみつ放しの「放し」ばかりでは、リズムに乗れない。衰亡の波の谷間にあるときこそ、いかにすべきか反省し、研究し、改善改良の工夫を加え、アイデアを活かしつつ勇んで働く。これがリズムに乗ることなのだ。

これらがかんとんにはゆかず、苦しむときもある。しかし、そこにこそ人生の妙味があるのではないか。逆境のリズムの中にこそ、順境のリズムが盛り上がりつつあるのである。

生老病死も人生のリズムの一つである。病気をせず、老衰で死ぬ

人もあるであろうが、それでも歯が欠けたり、カゼをひいたり、ケガをしたりするくらいはあるであろう。生まれるリズム、死ぬリズム、病気やケガのリズムも厳然として存在するのである。

表面的にみてよくないと思われるリズムのときは、まず、そのリズムに在ることを肯定し、恐れたり、憎んだり、怒ったりする気持ちを早めに捨てて、朗らかに乗ることである。

朗らかにとは明るい気持ちのことだ。病気になる、痛みもひどく、苦ししいのに何が朗らかになれるかと反撃されるかもしれないが、その痛さ、苦しさを「これもリズムなのだ」と受け入れることである。

痛いのは痛いのだし、苦ししいのは苦ししいのであるから、そう受ける以外にはないではないか。ただ「痛い、苦しい。ダメだ！」などと泣き叫ぶだけでは、リズムに乗れない。そうした朗らかな心で、さらに工夫研究をして、心を練り上げるのだ。

（月刊『新世』一九八六年九月号より）